

宗教心と根本言 IX

本多
HONDA
Hiroyuki
弘之

「根本言」たる「南無阿弥陀仏」を、親鸞は『無量寿経』の体であるとし、この経を、浄土真宗の根本標識としてかかげた。そして、その『経』に説きだされている宗は、「本願」にあるとされた。詳しく述べれば、本願の因果による一切衆生の救済、すなわち凡愚をして成仏道を成就せしめる仏法を明らかにするものと見られただけである。

これに対して天親は、『無量寿経優婆塞提舍願生偈』と、『無量寿経』の論であることを表題にか

かげながら、自己の唯識思想の菩薩道を成就すべく、論偈を展開している。

そして大乘の菩薩道は自利利他の同時成就を目指すものであるから、その成就を仏土への願生を通して完成するがごとくに表現している。

偈文はまず、「世尊、我一心に、尽十方無碍光如来に帰命して、安楽国に生まれんと願ず」と序を始める。そして、その安楽国の内容を「觀察」し、それから全体を「回向」して結んでいる。

その偈文を自ら解釈するのが、解義分であるが、そこにおいて「五念門行」を開いて、願生は「奢摩他」(第三門)に当たり、觀察が「毘婆舍那」(第四門)であるがごとくに解説している。その意図は、菩薩行としての自利利他を成就するためであり、はじめの四門は自利、第五門は利他であるとされる。

曇鸞は菩提流支三蔵に出遇って、厳しく求道の根本問題を教えられたと伝えられており、その後の人生を尽くして、『浄土論』の注釈を自己

の求道の課題として歩まれたと拝察する。そして、解義分の五念門を偈の「礼拝・讃嘆・作願・観察・回向」に配釈された。その上で、阿彌陀如来の本願力すなわち「他力」を、根本的なよりどころとして、この五念門行によって「無上菩提」を成就しようとして歩まれたのである。その他力を、転輪聖王の軍勢が天を飛んでいくのに乗ずれば、千里も遠くはないようなものだ、と例えている。

そして、そういう道を他力によって成就するのは、「世尊、我一心」と述べる論主天親自身であり、またそれを拝受する曇鸞自身でもある、と見ているのである。これは仏法を求める道に、難行・易行があるけれども、自己自身が歩み得るのは、易行道であるという選びを取るのではあるが、仏道を成就する主体は自己自身であるという点では同じような立場であるとも言える。自己に発起する菩提心を、他力を縁として成就させようという意思のあり方からすれば、これは根本的構造としては、「自力」に立つ方向ではないか、とも見られるのである。

問題は、『無量寿経』の法蔵菩薩の物語をどう理解するか、ということになる。別言すれば、罪惡の凡夫の自覚において、願生する自己の「自力心」をいかにして克服できるか、という

ことである。そのことは、願偈の「我一心」の「一心」をいかなる意味であるか、と問うことであり、曇鸞が解釈するように、「我」が「自大我」などではないということ、いかに確保できるかということでもある。

親鸞は、この「一心」を、『無量寿経』の本願成就文によって成り立つ「信心」であると見た。それがつまり「如来回向の信樂」であると言われるのである。それは「我一心」が、自我心の表現ではないことを、鮮明にするためである。我らに起こる信心は、間違ひなく自己において起こってくる「こころ」であるけれど、自我心を依り処にして起こるのではなく、「我」無くしてしかも自己に起こる心、文字通り本願に依拠することで「本願成就」として起こる心だと言っわけである。

したがって、その一心の因位たる願心には、天親が語る菩薩行の「五念門」がはたらいており、五功德門行（果）の功德を、大悲によって「回向」せんとする如来によって、「我心」が「如来回向の菩提心」へと転成されると了解されたのではないか。だから、転成された心は、「転悪成善」という本願力の表現通り、凡夫の自我心を超えた心だと言われるのである。

この場合の回向する「如来」は、果たる阿彌

陀の立場を転じて、衆生と成った如来、因位法蔵願心が凡夫そのものに成って「兆載永劫」に修行しようとする因位の如来である。親鸞における「他力」とは、したがって凡夫の外側から働く力として、増上縁たる名号があり、この因位となった如来は、凡夫の内に凡夫を転じて仏法を聴聞し、仏法を自己の課題として歩み続けるの願力である。

「信巻」で問題になる「三一問答」は、如来因位の三心（至心・信樂・欲生）が「一心」そのものの、すなわち「眞実信心」であることを、論究している。その信心は、「眞実信心は必ず名号を具す。名号は、必ずしも、願力の信心を具せざるなり」と押さえられていて、「聞其名号信心歡喜」と語りかける本願成就の文を、徹底的に解明していることが、拝されるのである。そして、「聞其名号」の「聞」とは、「仏願の生起本末を聞きて、疑心あることなし」と押さえられる。

身で読むという言い方があるが、この聞は単に耳や頭脳で聞き分けるのではなく、「聴聞する身」で聞くこと、換言するなら、「眞実信心」が聞き当てることなのであろう。

（ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長）